

原 著

ペスタロッチーの貧児・孤児救済の意義  
—18世紀スイスの子ども福祉の状況から—

Die Bedeutung der pestalozzischen Hilfe für armute Kinder und Waisen  
— Die Kinderfürsorge in der Schweiz um 18. Jahrhundert —

光田 尚美

**要約：**本稿の目的は、ペスタロッチーの貧児・孤児救済の意義を評価することである。その際、彼の業績が歴史的な状況規定要因との絡み合いのなかで主体的に展開されたものであることに注目し、18世紀スイスの諸条件や課題に照らしながら、時代の文脈におけるその位置を明らかにする。

まず、時代的課題が工業化に伴う社会的貧困にあることを指摘し、彼が見つめた下層民の窮状を、風俗史や統計資料を用いて示した。また、下層民の子どもや孤児たちの生活、および彼らの福祉にかかわる施策の動向を整理し、当時子ども福祉の課題（衛生問題、児童の酷使、扶養コストなど）を明らかにした。さらに、子ども福祉改革を牽引した民間主導の施設を紹介し、彼の試みがこうした流れに位置づけられるものの、それを支える原理（人間陶冶としての労働教育、産業の発展と人間の育成の統一的把握、家族共同体を基盤とする施設教育）は時代の制約を乗り越える要素を含んでいたことを指摘し、暫定的な評価とした。

**Key Words：**18世紀スイス、社会的貧困、子ども福祉、貧民教育施設、ペスタロッチー

はじめに

教育学史上、民衆学校の改革者ないし初等教育法（メトード：Methode）の開発者としてしばしば取り上げられるペスタロッチー（Pestalozzi, J.H. 1746～1827）であるが、彼はまた、その生涯にわたり貧児・孤児の救済に尽くした、子どもの福祉の実践者でもあった。例えばノイホーフでの貧児救済事業やシュタンツでの教育実験は、こうした彼の業績をよりよく後世に伝えるものであるといえる。

筆者は先に、ペスタロッチーの思想と実践が子ども福祉をめぐる理論・実践の萌芽に少なからずの影響を与えたとして、教育学の領域にとどまることのない人間生成の原理をそこに見出そうと試みた。そして彼においては、「居間の力（Wohnstubenkraft）」（＝家庭という私的環境のなかで展開される人間生成的作用のもつ力）が、子ども、母親、さらに祖国に生きる同胞（民衆：Volks）を人間としての「自立（Selbständigkeit）」へと導く原理となっていることを指摘するとともに、その原理が時代の制約を

超えて、「人が人をつくる」という営みの立ち返るべき原点であることを示唆した。それはつまり、ペスタロッチーの思想と実践の普遍的な意義であるといえる。

しかし一方で、彼の試みが時代の制約のなかでいかに評価されるかという問いもまた確認しなければならないと考える。クラフキー（Klafki, W.）が指摘するように、ペスタロッチーの導き出す解答は「別の経験や研究、思考過程から見れば、時代の制約を受けたものであることが証明される」（Klafki, 1975, S.39）。ゆえに彼の問題設定をよりどころにしながらも、時代の射程距離や限界を意識し、彼の業績を再評価していくことが求められるだろう。そのためには、彼の生きた時代の諸条件や課題を読み解くとともに、彼の思索や活動を、歴史的な状況規定要因との絡み合いのなかで主体的に展開されたものとして捉え直していく必要がある。

そこで本稿では、18世紀を中心とする時代において、ペスタロッチーの祖国スイスがどのような時代的課題に直面していたのかを、民衆の生活の移り変わりや子ども福祉をめぐる動向を中心に論じ、そのうえで彼の貧児・孤児救済事業の意義を評価したいと考える。とはいえずイスの社会史、とりわけ18世紀近代の福祉及び文教施

策に関する資料は少なく、国内で入手できるものといえ  
ば通史や概説がその大半を占めている。その限りにおい  
て、彼の試みを歴史的に規定した諸要因は十分に伝えら  
れていないように思われる。

ペスタロッチャーが生きた時代とは旧体制から近代社会  
へと展開していく激動期であり、市民革命や産業革命な  
ど、時代を動かす大きな波が押し寄せていた。ゆえにヨ  
ーロッパ史研究を通して、当時の社会の諸相を推察する  
こともできよう。しかしスイスの事情、なかでもドイツ  
語圏スイスの特殊性となると、こうした既往研究からは  
十分に導かれえない。よって筆者は今年9月にスイスに  
赴き、現地にて情報及び資料収集を行った<sup>(1)</sup>。その一  
部を手がかりに、18世紀近代のスイスにおける子ども  
福祉の実情を整理・報告するとともに、スイス史家らの  
福祉史認識における彼の試みの位置を確認したい。

まず、18世紀のスイスにおける下層民の実際を、ア  
ンドライ (Andrey, G.) らやクレスポ (Crespo, M.) らの  
先行研究によりながら整理し、貧児・孤児の生活実態に  
焦点を当て、子ども福祉をめぐる問題状況を確認する。  
さらに、当時の子ども福祉の基本的な考え方や方向性を  
示すために、公的な施設教育の動きについてまとめる。  
最後に、こうした時代要因のなかでペスタロッチャーの試  
みはどのように評価できるのかを確認する。

## I. 18世紀スイスの民衆生活の実際

18世紀を中心とする時代のスイスは、西欧社会の例  
にもれず、政治、経済、産業、芸術、宗教などのさまざ  
まな分野で大きな転換期を迎えていた。なかでも農村地  
方の下層民の生活に直接的な影響を与えたのが、工業化  
(Industrialisierung) に伴う産業構造や経済システムの  
変化であった。そこで以下、工業化の影響に焦点を当て、  
近代スイスを支えた労働者へと変貌していく下層民の生  
活の実際を描写したい。

### 1. 下層民の窮状

マニュファクチュアの進展と工業化の波は、輸送・移  
動にかかる交通網の整備や公衆衛生・人口増加に対応し  
た都市計画、農業労働における近代的な用具・機械の使  
用などを推し進め、中世都市や農村地域の景観を変貌さ  
せた。また、環境破壊は当時すでに問題視されており、  
環境汚染の兆候も表れ始めていた。こうしたことは、自  
然の生態学的均衡にも変動をもたらした (cf. Andrey,  
2006, S.565f.)。他方、工業化は家内労働 (Heimatarbeit)

や工場労働など、新たな仕事の機会を生み出すことにも  
寄与したが、これらの仕事に労働力を提供したのが、貧  
民や流浪民 (Heimatlosen: カントン<州>の境界を越  
えて移動する日雇いの労働者も含まれる)、スイス周辺  
地域からの移民<sup>(2)</sup> など、階層構造の下位に位置づけら  
れた人々であった。

当時のスイスでは、「市民」と「市民でないもの」と  
が明確に区別されていた。中世には一定の資格条件 (資  
産を有するなど) を満たせば登録簿に記載され、市民と  
して行政参加も可能であった。しかし三十年戦争以来、  
資産のあった者が窮乏したり、人口増加に伴って増えた  
市民が既成市民の特権を荒らししたりしたこと、市民  
の新規登録は制限されていった (cf. 美根, 2003, pp.79  
~ 80.)。そして17世紀末にはほとんどのカントんに市  
民登録の停止、あるいは禁止が広まり、18世紀になる  
頃には生まれながらの身分が固定されるようになってい  
ったのである。

こうして17、18世紀のスイスでは、貴族に続く「政  
治に参加することのできる都市の市民、ないしはランツ  
ゲマインデ型カントンの地方民」のほか、「いくらかの  
土地を所有しているが、市民の資格をもたない農民 (地  
方の土地所有者)」、「土地所有者に雇われて仕事をする  
日雇い労働者」、「土地から土地へと移動する流浪民、な  
いしは土地をもたない貧民」といった階層構造<sup>(3)</sup> が成  
立した (cf. Im Hof, 1996, S.23.)。商工業の営業免許や共  
同牧草地の使用権などが与えられた市民に対し、下層民  
には定住権が与えられただけである (場合によっては、  
定住権も認められなかった)。彼らは社会的に不利な立  
場にあった。

### 2. 工業化の恩恵

下層民の窮状に対して、伝統的には教会が救済事業を  
行っていた。それは「宗教に動機づけられた」、「任意で  
管理システムもなく、助けを必要とすると認められた個  
人に与えられる、自然発生的な救済給付」であり、「目  
下の窮乏を軽減することに尽くすもの」 (Crespo, 2001,  
S.34.) であった。しかし、15世紀末頃からの貧民人口  
の増加と政府の権力の増大によって、貧民救済は公的な  
機関に担われるようになった。

貧民や移民を抱えるのは、カントンにとって不都合な  
ことであった。彼らはしばしば物乞い (Bettler) とな  
り、社会の安寧や秩序を乱すとされたからである。ゆえ  
に政府は、物乞いの摘発や強制追放など、管理体制を強

化することで問題に対処しようとした。こうした措置は、管理の厳しいカントンを逃れる流浪民を生み出すなど、新たな問題を引き起こすことにもなったが、19世紀に入る頃まで近代の貧民福祉政策の中核を担っていた（cf. Crespo, S.34.）。

下層民に定期的な労働の機会を提供した工業化は、政府の悩みの種を部分的にはあるが解決に導いたといえる。確かに、工場が無数の労働者を引き寄せ、素性の知れない新来者を受け入れる地方の社会秩序を脅かすということも懸念されたが、彼らを社会に統合したことは多大なる恩恵でもあった（cf. Andrey, S.547.）。

### 3. 社会的貧困の問題

当時、スイスではしばしば社会的貧困（Pauperismus）が問題となった<sup>(4)</sup>。19世紀前半のワート地方の記録によれば、住民の8分の1が定期的ないし不定期の保護給付を受けていたことが確認された。また市の報告（Ein amtlicher Bericht über die Armengenössigen, 1834）では、カントン平均保護給付率（全住民における保護対象者の占める割合）10.6%に対して、実に5つの地区がそれを大きく上回る高額給付区域として記録されている。また、保護給付の負担が大きい区域ほど多くの物乞いを抱えていることも明らかにされている（cf. Andrey, 2006, S.570.）。

これら調査や報告を受けて、公的保護の原則の是非をめぐる議論が起こり、保護に反対する立場の者も現われた。彼らは貧困を「飲酒癖、無為、悪習によっておのずから引き起こされたもの」（Crespo, S.35.）とみなし、公的機関の救済自体が下層民の怠惰や無為をいっそう助長し、経済的自立を妨げていると糾弾した。なるほど18世紀末頃には、社会的貧困の原因が労働者階層の人口増加や景気変動による失業、労働賃金水準の低下など、近代の経済システムの内部にあることが究明されるようになっていく。しかし、それでもなお貧困を自己責任とする考え方は根強く、18、19世紀の公的な貧民福祉政策における管理規制の強化を後押しすることとなった（cf. Crespo, S.44f.）。

### 4. 労働者家庭の窮乏

貧困を自己責任とみなす考え方が支持された背景には、次のような事情もあった。この時期すでに、スイスの紡績業はイギリスと競い合えるほどに躍進していた。それを支えていたのが、下層民の「安い労働力（billige Arbeitskräfte）」であったのだ。その確保を妨げることは「スイス工業の破滅を意味する」との主張の前には、

貧困という事態の改善を求める声も鳴り止んだという（cf. Andrey, 572.）。下層民の貧困はむしろ、経済発展の証左とみなされていたようだ。

それを裏付けるかのように、当時の事業主は最低限度の収入など顧慮せず、賃金体系に需要と供給の原理を適用していた。また機械の導入で分業化された工場生産システムにより家内労働の需要は減少し、賃金は最低水準にまで引き下げられた。家内労働は農村の無産階級にとって貴重な収入源であったため、数少ない仕事をめぐって競合することもあった。こうした事態は、労働者をいっそう不利な立場へと追いやった（cf. Andrey, S.571f.）。

それでは、彼らの「労働力」とはいかほどであったのか。19世紀前半のスイス、フランス、イギリスの工場労働賃金の比較がある。それによると、紡績工場の労働者に支払われた名目上の賃金について1875年を100としたところ、1830年のスイスは46pt.、フランス59pt.、イギリス64pt.であったという。これは定期的に調査されたものではないので、スイスの賃金水準が恒常的に低かったとは断言できない。しかし1844年のフォレル（Forel, A.）の調査からも、スイスの紡績工場の労働賃金が他の労働（織物やチョコレート、革なめし、冶金、家内労働など）のそれと比較しても低く、賃金体系の最下位にいたことがわかっている（cf. Andrey, S.572f.）。

また、たとえ紡績業よりも多く支払われたとしても、労働者家庭の家父が単独で生計を担うことは困難であった。表1によれば、父ヨーゼフの1月の稼ぎは136～182バツツェン<sup>(5)</sup>である。穀物市場の状況によって変動はあるが、通例1ポンド（500グラム）のパンが1、2バツツェンであったことから、家計の厳しさは容易に推察される。また、不作や食糧難の年には食料価格が高騰する。実際に、1816～17年と1845～46年には食料供給危機があった。こうした時期には、家族全員で働いても、日々の糧を稼ぐことは困難であっただろう。

表1：1801年のSemsalesのガラス工場における労働者家族の労働（泥の採掘）と賃金

毎月の支払	5月3日	6月6日	7月4日	8月9日	9月8日
Joseph Gothuey 7バツツェン／日	7×21日 147	7×26日 182	7×20.5日 143.5	7×24日 168	7×18日 126
Maria 妻 3.5バツツェン／日	3.5×12日 42	3.5×26日 91	3.5×20.5日 71.75	3.5×23日 80.5	3.5×18日 63
Jean 息子16歳 7バツツェン／日	7×21日 147	7×26日 182	7×20.5日 143.5	7×23日 161	7×18日 126
Joseph 息子14歳 3.5バツツェン／日	3.5×21日 73.5	3.5×26日 91	3.5×20.5日 71.75	3.5×25日 87.5	3.5×18日 63
Laurent 息子9歳 2.5バツツェン／日	2.5×12日 30	2.5×26日 65	2.5×20.5日 51.25	2.5×25日 62.5	2.5×18日 45
月労働日の合計	87日	130日	102.5日	120日	90日
家族の月の賃金	439.5	611	481.75	559.5	423

この家族は、泥の採掘にかかる労働と並行して耕作も行っていた。(Andrey, S.574.)

## II. 子ども福祉の動向

### 1. 貧困の管理と貧民福祉

社会的貧困は、地方では物乞いを、そして都市部ではしばしば失業者を増加させ、貧困化への負のスパイラルを描かせていった。こうしたなか、中世的な貧民救済(Armenhilfe)は改革され、公的な社会福祉政策としての貧民福祉(Armenfürsorge)が注目されるようになっていく<sup>(6)</sup>。

近代スイスにおける貧民福祉施策は、貧民保護(Armenpflege)に代表される、カントン政府の福祉活動に特徴的である。以下、その制度について少し詳しく見ていきたい。

貧民保護は、端的に言えば、集められた市民の寄付を困窮者へと分配するという保護給付の施策である。それはまず、受給資格のある困窮者の選定から始まるが、この受給資格は市民権と結びついていた。つまり給付の対象となるのは「当地域に住む(ortsansässig)」困窮者であり、他地域からの物乞いは除外され、追放されたり、あるいは出生地に戻されたりしたのである。

「当地域に住む」困窮者は、さらにまた政府貧民局の統一的な規準に基づき、「受給にふさわしい(würdig)」者と「ふさわしくない(unwürdig)」者へと分けられる。前者は、例えば「働くことのできない高齢者や病人、虚弱な者、低所得の子だくさん家族、一時的な失業者、父親のいない子ども(夫を失った子をもつ母親)、未婚の女性、孤児、捨て子」(Crespo, S.35.)らであった。働ける者はいかなる保護も認められなかった。

こうした貧民の管理は、貧民保護員(=徴募された市議会の構成員や無給の市民)によって実行された。「福祉の個別化と私的な領域における管理の拡大」(Crespo, S.35.)と評価されるように、管理・監督にあたっては、貧民リスト(保護受給者の職業、所得、子どもの数、給付額を登録した)を作成したり、都市をより小さな単位 of 区に分け、地区内の受給者宅を貧民保護員が個別に訪問したりすることも行われた。

加えて、受給資格者であっても働くことのできる者は労働を義務づけられ、仕事に就かない場合には給付を取り消す措置も採られた。一方、「働くつもりのない」貧民や流浪民は、矯正施設や刑務所などに収容され、強制労働が課された。

### 2. 子ども福祉の措置

貧民保護の対象には子どもも含まれていた。これら子どものための措置としては、救貧院(Spital)や孤児院への収容、食料(ムースとパン)の配給、奉公、の3つの方法が考慮、選択されていた(cf. Crespo, S.35.)。

Spitalという施設は、スイスやオーストリアでは一般に病院を意味する<sup>(7)</sup>。「そこに収容された子どもたちは、高齢者、病人、衰弱し精神を病んだ大人たちと一緒に成長した」(Crespo, S.35.)と報告されているように、語意通り、実際は病院として機能した施設であったようだ。内部では「孤児、あるいは子ども部屋(Waise- order Kinderstube)」が設けられ、他の収容者と区切られることもあったが、孤児院や捨て子院のない地域では、19世紀に入るまで、病院その他の機能を兼ねた施設に子どもを収容するのが一般的であった。

年長者には食料の配給が行われたが、それ以外の点ではその境遇に委ねられていた。ゆえに彼らの多くは無産の労働者か、あるいは物乞いへと転じていった。一方、こうした年長者をはじめ働くことができるようになったものには、地方の「養い親(Pflegeeltern)」のもとで奉公させるという措置も採られた。それは、子どもの福祉の財政的メリット(特に食費にかかるコスト削減)とともに、個人の職業準備による貧困化防止の効果も期待されていた(cf. Crespo, S.41.)。

### 3. 矯正施設における子どもの生活

社会的貧困の深刻化を背景に、貧民福祉政策の主眼は必然的に、労働の義務化と倫理的な生活指導を前提条件とする貧困化の防止に置かれた。政府は強制労働施設(矯正施設: Zwangarbeitsanstalt)を設立し、貧民および貧民予備群の矯正に着手した。

近代に登場したこうした施設は、初期資本主義の関心にも合致するものであった。その目的は、一つに「従順な臣民、訓練された労働者へと成長させること(教育的な目的)」、二つに「労働の強制や市民的・キリスト教的な労働倫理を浸透させることによって貧困問題を解決すること(社会政策的な目的)」、そして三つには「施設の自家需要を賄う」とともに「事業主に最も安い労働力の自由な行使を可能にすること(経済的な目的)」(Crespo, S.37.)にあり、子ども福祉の政策はこれら関心とも密接にかかわっていた。というのも、子どもを早期に働くことに慣れさせれば、「物乞いや無為に馴染ませることなく、自立的で、かつ公的支援に依存することのない生活」

(Crespo, S.37.)へと導くことができると考えられたからである。よって矯正施設の強制労働プログラムは、原則として子どもを含めた全貧民を対象とするようになった。

強制労働と子どもの公的な福祉がスイスで最初に結びついたのは、1637年、チューリッヒで設立されたエッテンバッハ(Ötenbach)の刑務所兼孤児院(Zucht- und Waisenhaus)であった。この施設には、市民の規律に対して反抗的な態度を示したり、あるいは刑法上告訴されたり、刑罰を下されたりした者をはじめ、放浪者や物乞い、土地っ子ではない物乞いの子ども、怠惰な貧民、そして一般市民の家庭において教育困難とされた子どもなどが収容された。これら人々の処罰と矯正が行われる一方で、孤児院では、一般的な市民の婚姻から生まれ、孤児となった子どもの保護と養育も行われた(cf. Crespo, S.38.)。両者はその機能を異にしていたが、収容者はともに労働に従事した。

この施設をモデルとした刑務所兼孤児院が、ベルン(1657)、ザンクト・ガレン(1663)、バーゼル(1667)と相次いで設立されたことからわかるように、矯正施設、刑務所、孤児院の結合は子ども福祉にとっても有効な手段とみなされていた。しかし17世紀、遅くとも18世紀には、もはや教育とは呼べない過度の工場労働が施設に行き渡るようになっていた。クレスポは当時の孤児院や子どもたちの様子<sup>(8)</sup>を次のように描写している。

「子どもの労働力は情け容赦なく搾取された。病気や身体が弱いといった事情は、労働免除の理由として認められなかった。(中略)反抗的な、または『働くことが嫌い』で逃亡する子どもは、ボールや丸太のついた鎖につながれて転がされ、さんざんに鞭打たれた。(中略)子どもは狭くて暗く、湿っていて、悪臭を放つ部屋で生活していた。たいていは3人か4人の子どもで一つのベッドを分け合った。シーツや藁はめったに交換されないで、(中略)疥癬や皮膚病、眼病にかかったり、害虫(獣)に襲われたりすることもあり、伝染病の危険も大きかった。(中略)栄養もまた偏っていた。新鮮な野菜や果物が不足していたため、壊血病にかかった。(中略)」

刑務所の囚人—たいていは窃盗や物乞い禁止違反で逮捕された—と仕事で毎日接触することによって、市民的な徳というよりむしろ、貧民や軽犯罪者の態度様式、悪知恵、生きるための戦略についての知識を身につけていった」(Crespo, S.39.)。

この他にも囚人や施設職員、年長の児童による性的暴

行も行われていたのではないかと伝えられている。いずれにせよ、当時の公的な子ども福祉施設の実態は、倫理的かつ教育的なものではなかった。傷つき、疲れきった子どもたちの労働が利益につながるはずもなく、さらには就労が将来の貧困化を防ぐという期待も、厳しい現実によって打ち砕かれていた。というのも、施設を出る若者の前に現実に関わっていたのは、「ツンフトの規律による、手工業の親方への仲介」(Crespo, S.40.)というわずかな道だけであったからだ。元入所者に対する社会の拒絶的態度に直面した若者の多くは、退去後しばらくして傭兵となるか、物乞いや犯罪者に身を落とし、再び矯正施設や救貧院へと舞い戻っていったのである。

### Ⅲ. 子ども福祉の改革

#### 1. 孤児院の分離と「養い親」のもとでの生活

17世紀末頃から、施設の惨状に批判の目が向けられ始めた。批判の焦点は、衛生問題やそれに伴う高い死亡率、非人道的な子どもの扱い、時代に遅れた宗教教育、そして将来の職業生活に対する教育の不備などであり、ドイツではこうした問題が「孤児院論争(Waisenhausstreit)」に発展し、マスコミを通じて広く世に問われていった(cf. Crespo, S.42. / Kallert, 1964, S.98.)。同様にスイスでも、聖職者や医師、啓蒙された市民らによって、施設の改善を求める提言や請願が再三にわたり市議会に提出された。

孤児院論争を一つの契機に、孤児教育の改革運動が開かれた。スイスでは18世紀末頃までに、少なくとも公的な孤児院を刑務所から分離し、子どもの保護と教育という孤児院の機能を回復させることが試みられた(cf. Crespo, S.40. / Kallert, S.98.)。

一方、食料品価格の高騰を背景に、政府が孤児院の生活費を賄えないという危機も生じていた。こうした事情から、施設扶養とは別の形式で子どもを保護する方策が注目されるようになった。すなわち、孤児院を解散し、収容されていた子どもたちを「養い親」のもとに送るという措置である。それはいわば寄食のシステムであったが、家族養育(Familienpflege)という観点から、子どもにとって「より健全である」(Crespo, S.41.)とみなされた。また、「養い親」となるのは地方の農家であり、彼らにとっても労働力を獲得できるというメリットがあった。

ところがその実態は、子どもにとって必ずしも有益なものではなかった。「養い親家族は子どもたちを気にか

けず、彼ら自身の利益となる労働のために利用し尽くした」(Kallert, S.102.),「彼らはしばしば養い親によって物乞いを強いられ、それによって急速に、物乞いの戦略や巧みな駆け引きに慣らされた」(Crespo, S.44.)と描写されているように、養い親に教育的な関心や配慮を期待することは難しかったのである。

## 2. 貧児・孤児のための私立教育施設—フランケからフルター、シェファール—

クレスポの指摘するように、17世紀末から18世紀にかけての子ども福祉の対象は極めて限定されていた。孤児院の収容条件は「市民の嫡出児であり、父親か両親を失っていること」(Crespo, S.41.)であり、市民の資格のない貧民や移民の子ども、非嫡出児などは保護の対象とはなりえなかった。そして孤児院における教育もまた、将来の貧困化を防ぐために実質的に寄与するものではなかったのである。

こうした現状に対して、18世紀から19世紀前半には新たな試みが展開されるようになる。それは保護の対象を貧児へと拡大し、かつ子どもの発達段階や境遇を考慮して教育方針を定めたという点において画期的なものであった。

端緒は、敬虔主義(Pietismus)の支持者に求められる。敬虔主義とは、17世紀末頃より展開されたドイツ・プロテスタントの宗教的な改革運動であり、理性信仰や独善的な学校神学の代わりに、内面化された敬虔さや実践的な隣人愛を重んじるという点に特徴がある。その代表的な人物に、ハレ大学を敬虔主義の地としたフランケ(Francke, A.H. 1663～1727)がいる。1695年、彼は貧児の宗教的無知に対抗するという目的のもと、貧児のための学校を設立した。それを皮切りに、あらゆる階層の子どもの教育を包含した統一的な学校・施設複合体を創設した。その業績によって、彼は子ども福祉の新しい組織形態を示したと評価されている。

フランケの「新しさ」は、次の3点に集約されうる。1つは「貧民福祉におけるイニシアチブが初めて個人を出発点としたこと」、2つは「信用取引に似た、個人による大型の献金に基づいて施設が運営されていたこと」、そして3つは「教育学的に基礎づけられた子どもの福祉が構想され、実践されていたこと」である。とりわけ3点目について、彼は敬虔やキリスト教的知性の涵養に重きを置き、子どもたちを従順、真理、労働への愛に導くことを目指した。対して、過度の厳格さや身体への罰で

もって規律を強いるような旧来の教育方法を拒絶した。それを裏付けるかのように、施設では就労を目的とする工場労働は退けられ、「忍耐強く、かつ親切な教師たちの監督のもとでの作業」が採用されていた(cf. Crespo, S.42f.)。

孤児院兼刑務所、作業所という形態が一般的であった18世紀初頭において、フランケの試みは際立っていたが、フランケの施設をモデルとした孤児院が創設され、ハレで養成された教育者が増えてくるにつれ、ドイツでは貧児・孤児の福祉が急速に整備されていった。そしてスイスにおける子ども福祉の改革、とりわけ民間主導による数々の試みもまた、フランケの影響を受けていた。

例えばフルター(Hurter, J.G. ～1721)は、1708年、敬虔主義の原理にもとづく最初の貧民学校を設立し、貧児、孤児、非行化した少年たちを受け入れた。敬虔主義が浸透することで資金が集まり、1711年、彼はさらにシャウハウゼンに孤児院を開設した。これはスイスで初めての私立孤児院となった。シェファール(Schefer, L. 1697～1772)もまた、ドイツ滞在期間中にフランケの孤児院を訪問し、1769年、それに倣った施設を開設した。それは、地方の養い親のもとへと送られた子どもたちを保護するための施設であった(cf. Crespo, S.43f.)。

## IV. 結びにかえて—ペスタロッチーの試みの意義—

民間主導の改革は、政府による支援を受けられないばかりか、しばしば妨害されることもあった。なぜなら、支配階層にとって生まれながらの境遇は「神の意志」であり、そこから引き離されるべきものではなかったからだ。彼らの目には、新たな施設が下層民を啓蒙し、その自由を求める努力を刺激するものとして映った。ゆえに危険視されたのである(cf. Crespo, S.44.)。

一方、政府は引き続き貧困化の防止策として、労働の義務を貧児・孤児教育の手段とするよう要請した。しかしそれは、かつての施設に支配的であった強制労働の類ではなく、敬虔主義や啓蒙の精神にもとづく、教育学的に動機づけられた「労働教育(Arbeitserziehung)」を主眼とするものへと転換されていった(cf. Crespo, S.46. / Kallert, S.98ff.)。

こうした動きのなか、ペスタロッチーは貧民教育施設を開設した。1771年、彼はビル郊外に農場(ノイホーフと名付けられた)を購入し、周辺の貧民の子どもたちをそこに収容した。農村にあったという点を除けば、彼の施設も私立孤児院の一形態にすぎなかったが、ノイ

ホーフを端緒とする彼の事業は、19世紀スイスの施設教育(Heimerziehung)に多大なる影響を及ぼしたとされる<sup>(9)</sup>。その意義はどこに見出せるのだろうか。以下、ペスタロッチャーに特徴的な着眼点を指摘したい。

### 1. 人間陶冶としての労働教育

ペスタロッチャーは施設の教育に家内労働を導入した。少年には畑仕事の傍ら機織りを、少女には家政の管理や家事に加えて糸紡ぎを課していたことが報告されている。その目的は何よりも、子どもたちの収益でもって農場経営を補完し、施設を維持することにあった。政府の支援を望めなかった私立孤児院の経営は、個人の資本や寄付によるところが大きかったが、彼はこれを自家で賄い、自立的な施設経営を確立しようとしたのである。

しかし、その収益は最低限にとどめられるべきとされていた。「貧民は貧困へと育て上げられなければならない」(P.S.W. Bd.1., S.143.)として、ペスタロッチャーは施設の生活を控えめにしようと心を砕いた<sup>(10)</sup>。彼の理解において、貧児・孤児が労働を通して社会的階層を超えていくことは決して現実的な要求とはいえなかった。追求すべきは、すべての人間に普遍に存する「人間性(Menschennatur)」の価値であり、それをいかにして「高める(veredeln)」かという問いであった。そして労働は、富裕な市民において以上に困窮する貧児・孤児にとってこそ、彼らが将来の社会的階層の内部でなお、自らの人間性を高めていくことに寄与すると考えられたのである。

したがって労働教育は終始、子どもたちの身体的陶冶に結びつけられた。下層民にとって身体は、「自らの生計を賄うために自由に使うことのできる唯一の資本」(Crespo, S.47.)である。その力や技能を高め、かつ正義や従順、秩序といった道徳的な意識とともに育て上げることができれば<sup>(11)</sup>、彼らはその人間性を見事に完成しようと確信されていたのである。

当時子ども福祉が労働と結びついたのは、職業訓練の要請もあった。しかし現実には、その目的のもとに誕生した「産業学校(Industrieschule)」においてさえ、単調な手技を繰り返すマニュアル化の工場に墮すという実態もあった。こうした状況に照らしてみると、ペスタロッチャーの試みは、時代の制約を受けつつも時代を超えた普遍の原理を追究しているといえよう。

### 2. 産業の発展と人間の育成の統一的把握

このことに関連して注目したいのが、ペスタロッチャーに特徴的な社会観や経済観である。彼の数ある論考には、経済的関心にもとづいて著されたものがいくつかある。その一つが、『奢侈制限論』(1780年)である。

『奢侈制限論』は、スイスの経済発展のために市民の消費をどのように制限するか、その妥当な範囲を問うた懸賞論文であるが、ペスタロッチャーは消費そのものではなく、それが負の方向に作用していることに問題があると指摘している<sup>(12)</sup>。とはいえ下層民にとって、事態はより深刻であった。工場労働によって彼らの生活水準は向上したが、その結果、消費に慣れてしまったのである。収入以上の消費は家計を破たんさせる。消費に傾斜した生活は、彼らをさらに貧困へと陥らせていった。

しかし産業の発展は、いまや人々の生活に必要な不可欠である。こうした社会的事情を踏まえうえて、ペスタロッチャーは教育によってこの事態を開閉しようと試みた。『リーンハルトとゲルトルート』(1781年)において、彼は手工業に通じた登場人物(マライリー)が、村の住民に家計簿や財産目録の管理、貯蓄や資金の運用法などを指導する場面を描き、家庭経済の安定が教育を通して図られることを説いた。一見すると、家計の知識を教えたに過ぎないように見える。しかし「教え」を通じて貧困の原因が洗い出され、自らの力や技能でその解決を図っていく方途が示される。そこには、新しい時代に生きる個人の育成という意図が同時に含まれているのである。

ここに、「産業の発展と人間の育成の統一的把握」(鈴木, 1992, S.271.)という着眼を見出すことができよう。それは当時の貧児・孤児の福祉において不可欠の要素であるとともに、ペスタロッチャーの思想と実践の近代性を特徴づける一つの要因でもあるといえる。

### 3. 家族共同体を基盤とした施設教育

しかしノイホーフの試みは頓挫した。イム・ホーフ(Im Hof, U.)は、それが大胆な企てであったために、保守派の強い抵抗に妨げられた(cf. Im Hof, 2007, S.90.)というが、自家で経営を賄うことの限界もあったと思われる。幼い子どもは当然ながら、その身体的能力の未熟さから、利益に結びつく十分な成果をあげられなかった。身体の訓練や技能の習得が進めば役立つようにはなるが、利益を生むようになるとすぐさま親元へと連れ戻されていたのである。

一方、身体的陶冶を目的とする労働は実利に結びつかないこともまた、自覚され始めた。身体的陶冶は、工場労働などの狭い範囲にのみ適応しうる手技ではなく、「さまざまな労働の、可能な限り広範な多様性」(Kallert, S.115.)の前提となる、身体のかな「技術(Kunst)」を目指すべきとされた。しかしこうした「技術」は、単純な作業の繰り返しからは完全に習得されえないものであった。ゆえに労働と教育との結合は保持しつつも、子どもの労働でもって生活費を捻出するという可能性は捨て去られなければならなかった。

これに対してペスタロッチャーの思索の前景に現われてくるのが、家庭的環境を中心に施設教育を展開するという主張であった。1799年、彼はシュタンツの孤児院において、施設の内部に家族的な結びつきを基盤とする共同体を形成し、自らと子どもたちとの間に確固とした父子関係を築き上げようと努めた。そしてそれが、「命令と調教の、(中略)秩序と服従の」(Röper, S.171.)教育学とは対照的に、子どもの自由な意志にもとづく包括的な人間陶冶を実現しうることを、教育実験を通して確認したのである。それは「貧民教育施設との関連において、家族的関係を中心とする施設教育に関する教育学的理論の最初の試み」(Röper, S.174.)と評価されているように、他に類を見ないペスタロッチャーの着眼点であった。

ペスタロッチャーの着眼は、限界状況にある子どもたちの持てる力を、その境遇や関係を最大限に活かしながら鼓舞するという意味において、少なくとも当時の慈善的な福祉事業とは一線を画するものであった。それは同時代の新しい子ども福祉の動向に合致するものでありながら、他の施策や事業では追究されえなかった先駆的な要素を含んでいる。限界状況にある人間を根源的に見つめつつ、そこから現実的かつ実現可能な原理を導き出すという彼の思考に、私たちはまだまだ学ばねばならない。

本稿では、スイスの社会福祉、とりわけ貧児・孤児の福祉にかかわる施策やその背景事情について述べ、こうした時代状況に対するペスタロッチャーの着眼点について指摘したが、時代的課題と彼の試みとの連関についてはさらなる資料を分析し、より精緻に論じていく必要がある。本稿を契機として、研究を深めていきたい。

#### 注

- (1) 収集した資料の一例を示す。Karl Rohrer : Das gesetzliche Armenwesen im Kanton Aargau seit 1804 und Reformbestrebungen für ein neues Armengesetz. Zürich

und Leipzig, 1918. / Hans Düssli : Das Armenwesen des Kantons Thurgau seit 1803. Frauenfeld, 1948. /

Helene Baltensberger : Das Armenwesen des Kantons Zürich vom Armengesetz von 1836 bis zu der Revisionsbestrebungen der 60er Jahre. Zürich, 1940. など。

- (2) 18世紀スイスの移民は、総計約25,000人(チューリッヒ:約4,000人)であった。物価の高騰した1771年には約40,000人の地方住民(全住民の約3分の1)が財を失った。下層民の困窮は大きな社会問題であった(cf. Widmer, 1979, S.23f.).
- (3) ジュネーブではさらに細かな階層分化があり、当該地方で生まれた移民の第二世代以降も「移住者」として登録され、参政権のない「非市民」として「一般市民」の下位に位置づけられていた(cf. 美根, p.81.).
- (4) クレスポは、工業化と下層民の生活との関係を次のように述べている。「大規模な貧困化は、農業組織(小規模な農家を囲い込むか、接収して土地所有を集積する)における構造変革の結果であり、資本主義の経済システム(貨幣経済, 工業生産)の形成や、伝統的な農業生産によって補うことができなくなった大規模な人口増大の結果であった。こうした長期の事情と並んで、不作や戦争のような現実的な危機が、食料難を伴って、下層民の状況を深刻なものとした」(Crespo, S.34.).
- (5) Batzen(バツェン)は15～19世紀に使用された銀貨であり、10Rappen(ラッペン, 1Rappen = 1/100Franken: スイス貨幣)に相当する。ドイツや近隣諸国で当時使用された貨幣でいえば、BatzenはGulden(グルデン)とKreuzer(クロイツェル)の間に位置し、1Batzenは4Kreuzerに相当した。
- (6) 中世後期や近代前期頃までの政府主導の施与的な福祉事業をArmenhilfe、近代の社会福祉政策における貧困へのアプローチをArmenfürsorgeと解し、それぞれ「貧民救済」、「貧民福祉」と訳した。
- (7) 他にHospitalという語も使用されており、区別して「救貧院」と訳した。
- (8) 児童労働はヨーロッパに共通する問題であった。19世紀前半期のイギリスでは工場法制定への動きが活発化していたが、紡績工場での糸紡ぎや炭鉱での採掘、煙突掃除など、法の網の目をくぐって児童の酷使は続けられていた(cf. 加藤・佐藤, 2008, p.43.). また1830年代のフランスでも、6～8歳の子どもが朝5時から遠く離れた仕事場へと向かい、1日に13～16、17時間の労働に従



- 事するという実態があった (cf. 佐藤・向井, 2008, p.49.).
- (9) ペスタロッチーの理論は、ホフヴィルのフェレンベルク (Fellenberg, P.E.v. 1771 ~ 1844) やフェレンベルクの教育施設にいたヴェルリ (Wehrli, J.J. 1771 ~ 1844) の貧民学校の基盤を形成した (cf. Crespo, S.47.).
- (10) ペスタロッチーは『シュタンツだより』のなかで次のように著している。「この国の最も貧しい子どもたち一人ひとりをできるだけ十分に教育することによって、彼らが自分の階層から引き離されるのではなく、その階層にしっかりと結び付けられるならば、民衆教育 (Volkserziehung) の最大の効果が得られるでしょう」 (P.S.W. Bd.13., S.3.)
- (11) 貧児・孤児の教育において、ペスタロッチーは身体的陶冶に加えて道徳・宗教的陶冶に大きな価値を置いた。それは自己自身を大いに尊重することへと導くとされた (cf. Crespo, S.47.)
- (12) むしろ消費 (= 奢侈: Aufwand) やそれを生み出す新しい産業については、一定の消費水準の上昇をもたらし、貧民の生活を向上させるとして、肯定的な立場を示している。

#### 参考文献

- ・ Gerges Andrey : *Auf der Suche nach dem neuen Staat (1798-1848)*. In. Redaktion Beatrix Mesmer : *Geschichte der Schweiz und der Schweizer*. Basel, 2006. S.527ff.
- ・ Maria Crespo : *Verwalten und Erziehen. Die Entwicklung des Züricher Waisenhauses 1637-1837*. Zürich, 2001.
- ・ Ulrich Im Hof : *Stand und Themen der sozialen, rechtlichen und politischen Auseinandersetzung in der Schweiz um 1800*. In. hrsg. von Fritz-Peter Hager und Daniel Tröhler : *Pestalozzi-wirkungsgeschichtliche Aspekte : Dokumentationsband zum Pestalozzi-Symposium 1996*. Bern, Stuttgart und Wien, 1996. S.21ff.
- ・ Ulrich Im Hof : *Geschichte der Schweiz. Mit einem Nachwort von Kaspar von Greyerz*. Achte Auflage, Stuttgart, 2007.
- ・ Heidi Kallert : *Waisenhaus und Arbeitserziehung im 17. und 18. Jahrhundert*. Frankfurt a.M., 1964.
- ・ Wolfgang Klafki : *Pestalozzi über seine Anstalt in Stans. Mit einer Interpretation von Wolfgang Klafki*, 6.Auflage. Weinheim und Basel, 1975.
- ・ Johann Heinrich Pestalozzi : *Sämtliche Werke*, herausgegeben von Arthur Buchenau, Eduard Spranger, Hans Stettbacher, Kritische Ausgabe, Berlin und Leipzig, 1927ff.
- ・ Friedrich Franz Röper : *Das verwaiste Kind in Anstalt*

*und Heim. Ein Beitrag zur historischen Entwicklung der Fremderziehung*. Göttingen, 1976.

- ・ Sigmund Widmer : *Zürich eine Kulturgeschichte 7*. Zürich und München, 1979.
- ・ 江藤恭二監修『新版 子どもの教育の歴史』名古屋大学出版会, 2008 年.
- ・ 鈴木由美子『ペスタロッチー教育学の研究』玉川大学出版部, 1992 年.
- ・ 光田尚美「ペスタロッチーの教育思想と『福祉』の原理」関西福祉大学社会福祉研究会編『現代の社会福祉 人間の尊厳と福祉文化』日本経済評論社, 2009 年, pp.66 ~ 83.
- ・ 美根慶樹『スイス 歴史が生んだ異色の憲法』ミネルヴァ書房, 2003 年.
- ・ 森田安一『物語 スイスの歴史 知恵ある孤高の小国』中公新書, 2008 (初版 2007) 年.

付記) 本研究は、平成 22 年度日本学術振興会科学研究費補助金 [若手研究 (B)・課題番号 20730517] の交付を受けた。

